

1991年度の方言研究ゼミナール（於・広島市）において、『方言資料叢刊』第2巻の発行についての話し合いを行った。第1巻「祝言のあいさつ」に続いて、どういったテーマを選ぶのか、その場でさまざまな意見が出され、活発な討議がなされた。つどう人々の研究分野のすそ野の広さを思わせるに十分であった。と同時に『方言資料叢刊』のテーマに関する意見の交換は、とりもなおさず方言研究の現在の状況と今後の研究の方向とへの言及でもあった。

方言の世界でのオノマトペの実態については、方言集や方言辞典、特定の方言のオノマトペの記述でその一端を垣間みることができるものの、全国を通覧し実態を把握することができない。全国規模での報告や分析が切望される。而して擬音語・擬態語といった方言象徴詞を取り上げることに決まった。

調査票の作成をはじめとする具体的な作業は、広島県在住の幹事にまかされた。調査票の送付を遅くとも7月末にとめざした。世話人の一人である室山敏昭氏に相談しつつ、幹事各自が案を持ち寄って検討した。方言象徴詞といってもその内実は漠然とし、全体を押さえることは難しいので、そのうちの一つの部分体系を切りとって対象にすることにした。しかし、その部分体系の記述の向こうには、全体系の把握を志向している。人は自らの感覚をどう表現しているのか、まずは、この分野を担っている方言象徴詞を「身体感覚を表すオノマトペ」として調査することとなった。

今回調査に用いた調査票を次に示している。どの部分の感覚であるかに注目し、身体部位によって、「全身の感覚」「皮膚の感覚」「頭部の感覚」「胴体の感覚」「手足の感覚」「関節（骨）の感覚」の6つに分け、次いでそれぞれさらに下位の分類を行った。76語の共通語のオノマトペを参考として掲げ、当該の文例に入るものを調査することで統一を図り、音訛形や、反復、特定音節の濁音化・長音化、促音・撥音の挿入添加などによる派生形なども積極的に取り立てることとした。ここに地域的な特徴が認められるかとの予想のもとにであった。

記述の内容は、語形、語義（例えば部位＜表面－深部＞、感じ方・痛み方＜瞬間的・連続的・反復など＞）、程度性＜強－普通－弱＞、品位、使用頻度、特定の動詞・形容詞などとの共起関係、感覚に伴う感情＜快、不快など＞である。語形が共通語形と一致していても、意味・用法がことなる場合があることに注意しておかなければならない。

「身体感覚を表すオノマトペ」か否か判断が難しいと考えられる。擬声・擬音語との境や感覚ではなく状態を表すものとの重なりなど一語一語について問題が存する。基本的には、主体が一人称であり、動詞「する」「痛む」・形容詞「痛い」と共起し修飾できるものである。周辺分野と密接に関係し合っていることが実態であれば、その関わり方を見定めることに意味があると思われる。

教示者（話者）は、原則として60歳台の生え抜きの女性とした。この分野は個人差が大きく、また臨時的なものが得られやすいと思われるため、その方言社会での社会習慣的なものを得る方策を考慮する必要がある。しかし、個人的・臨時的なものであっても、その背景にはそれを創出したものがある。

ともあれ、日本全国を視野においた、方言語彙のオノマトペの組織的な調査である。なにより資料的価値の高いものであり、ここからいくつもの新しい研究の視点がさらに生まれてくることが予想される。